

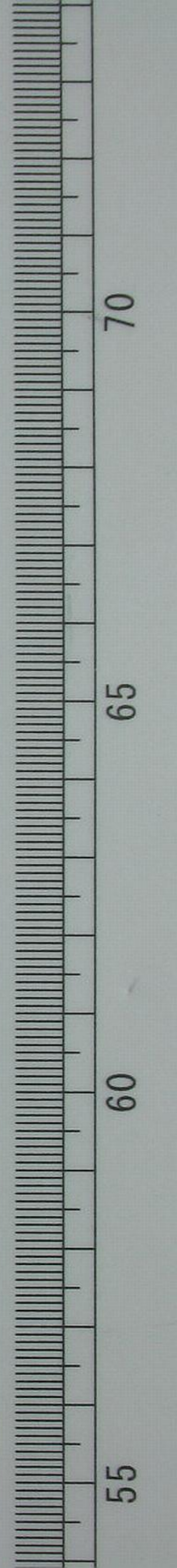
霜夜簾字迂筮第四編

藏書錦

出洞文未隊

大蘇

第四編







四編上

此のあはれに  
 可なり  
 通る人々  
 あり



大蘇芳年畫  
武田交來錄



四編下



四編中



霜夜鐘十

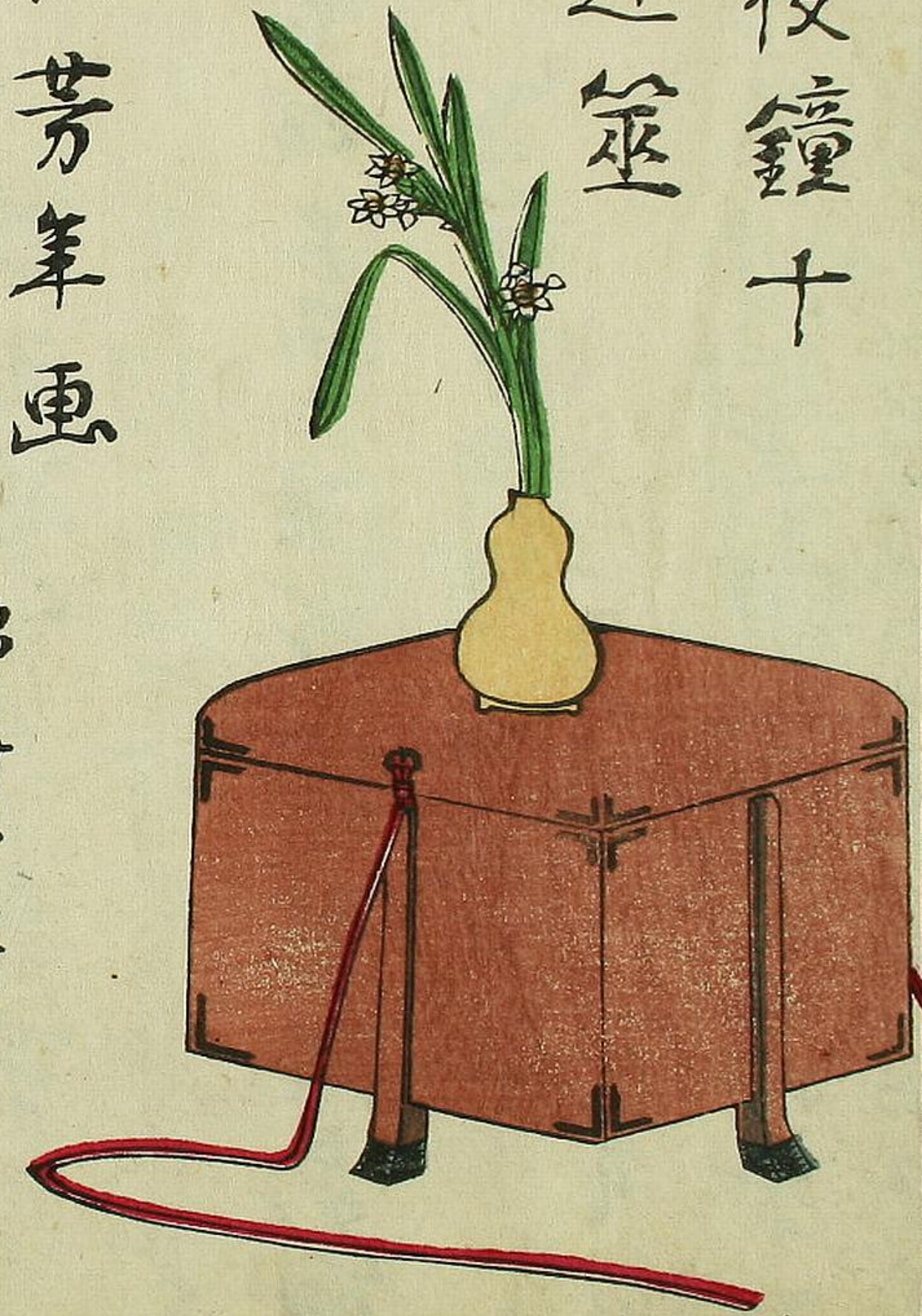
字辻筮

四編

上卷

大々種芳年画

錦寿堂様



機ふ臨に變に應て利と計る。帝に軍師の上は、人  
 萬事幸福乃。うまう來ると望むが中め。時勢を穿つ狂言  
 綺語世は人情の變に應て其水子が奇計を見せ楠公の  
 故を温ね、新富座當りそなき妙案に鳴渡りたる脚色を  
 其ま、霜夜の如く魁の功名を得、此合巻他ふ敵も中々  
 男時ふめたる大商利交來子が臨機の方畧その圖に能く中々  
 一と喜ぶあまの我知らば、たくあを横合々、爰へ驅出、ハッ申し  
 上ま兼て看官お待りの四編が出来仕り、弥々今般賣出しに  
 付て前編同様益々御高評の程と小生も偏へ奉願上ます

明治十三年十月

芳川春濤題



霜夜鐘四上





悪者癩の與七



再出杉田薫







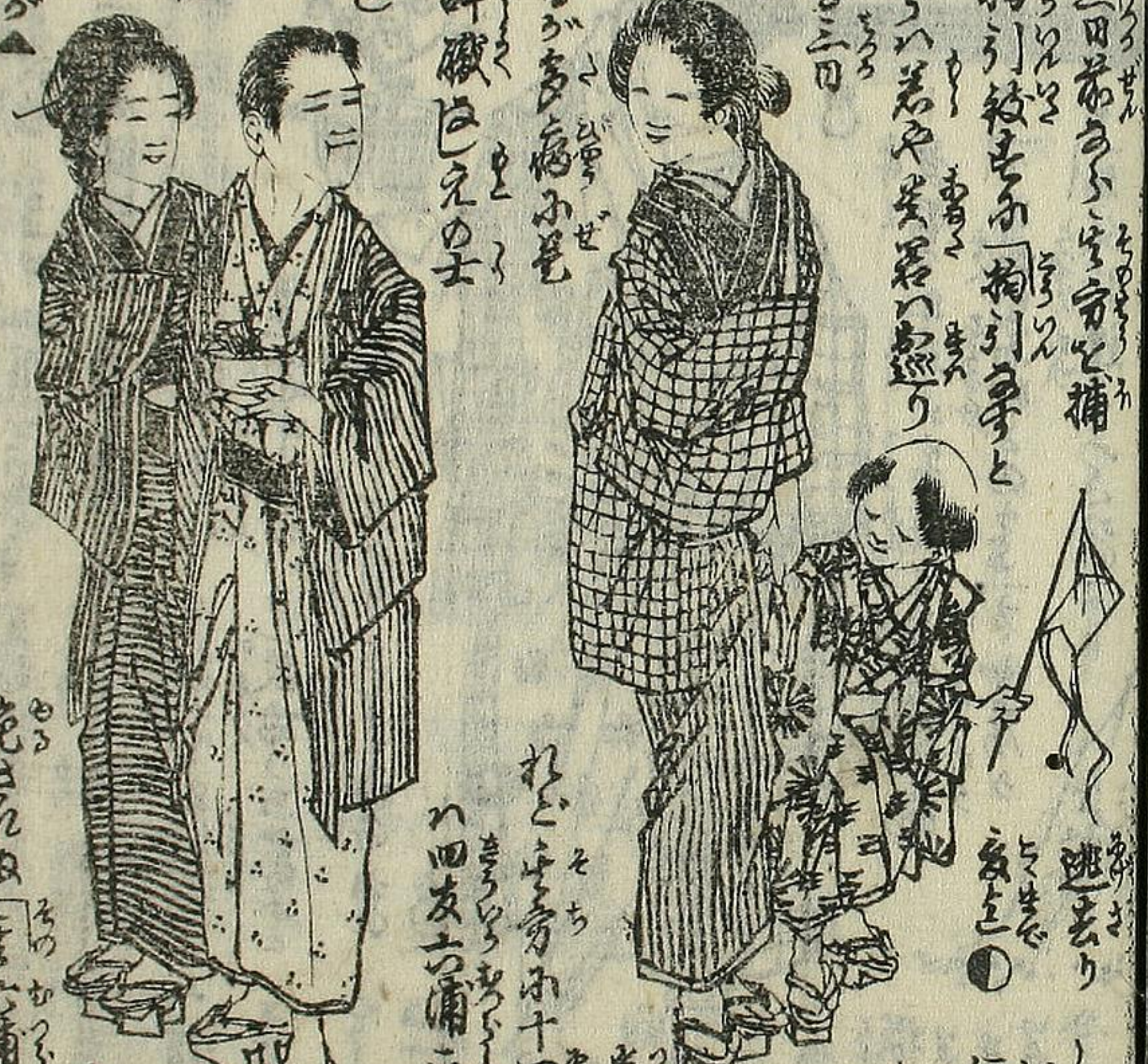
三島 鳴きまわりの「イ」五より外の若々  
 二内内の様布と羽織と  
 三 美し形うた  
 四 天狗小僧金助と  
 五 只今の中を通る鳴きまわりの  
 六 只今の中を通る鳴きまわりの  
 七 只今の中を通る鳴きまわりの  
 八 只今の中を通る鳴きまわりの  
 九 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十 只今の中を通る鳴きまわりの



十一 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十二 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十三 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十四 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十五 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十六 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十七 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十八 只今の中を通る鳴きまわりの  
 十九 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十 只今の中を通る鳴きまわりの



二十一 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十二 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十三 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十四 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十五 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十六 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十七 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十八 只今の中を通る鳴きまわりの  
 二十九 只今の中を通る鳴きまわりの  
 三十 只今の中を通る鳴きまわりの





ついでに... 宗... 宗... 宗...

三助町... 宗... 宗... 宗...

宗... 宗... 宗... 宗...

宗... 宗... 宗... 宗...

宗... 宗... 宗... 宗...

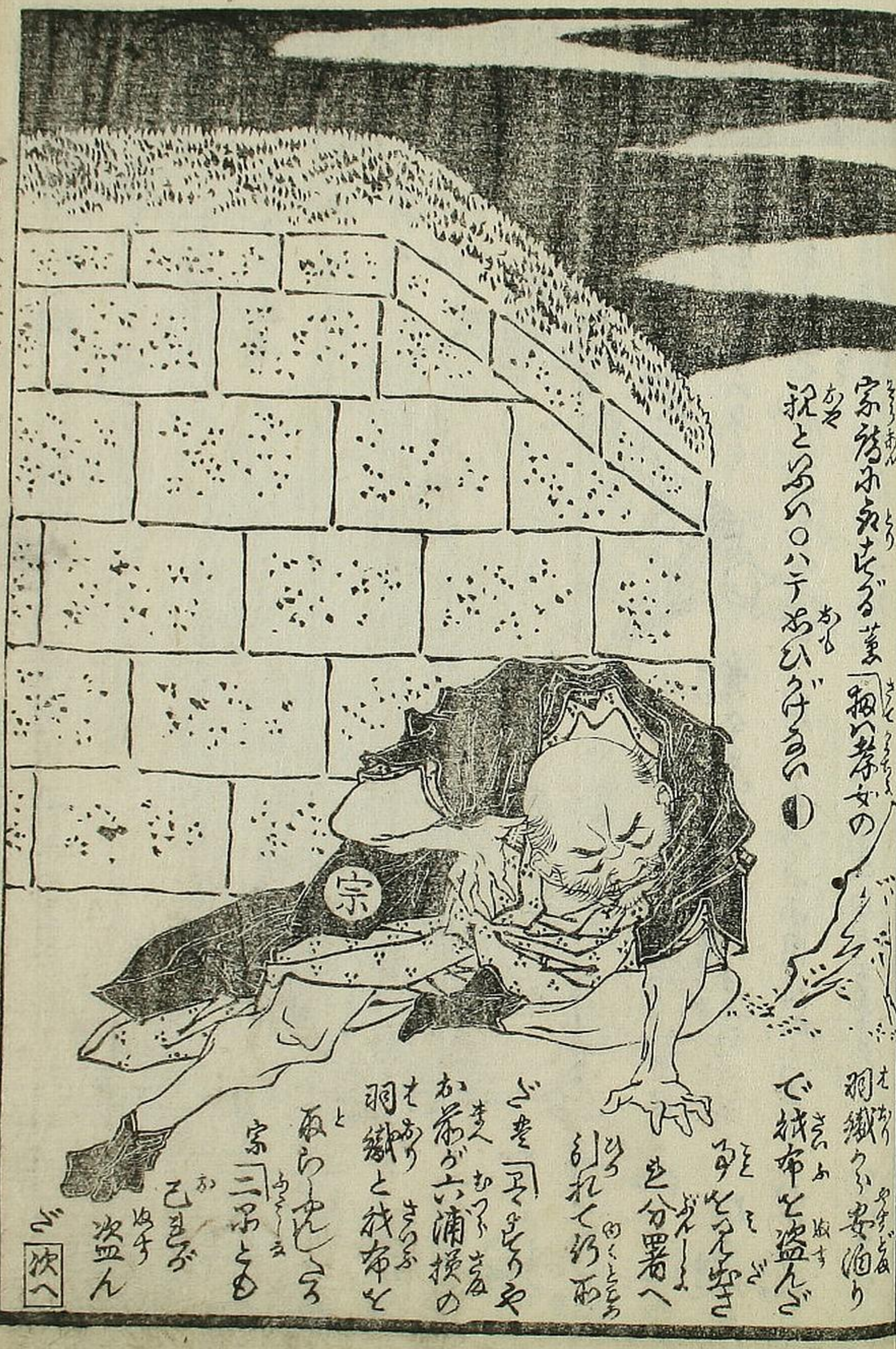
宗... 宗... 宗... 宗...

宗... 宗... 宗... 宗...



宗... 宗... 宗... 宗...

宗... 宗... 宗... 宗...



宗... 宗... 宗... 宗... 宗... 宗... 宗... 宗...









事はお前が... 宗... 豊... 免了... あつても... 事... と降



盗みの科... 可免... せぬ... 鬼のやう... 恨もせず



悪行七分

署へ出て自首  
徒ら犯せ

罪の

不刑を愛

後前へ来る

日夜勉

強技一高

友由も

特志の



△此を心中しとて憂く  
はる小判を足らけ後由  
小判七貫教程お貸しあり  
是て下をくを不返し中

さぬのそむを  
お貸しあり  
者依不返  
まごよは  
いこふ換由  
幼年お教  
由おませ  
あんが  
ぬきと

○か悪徳あつて二等

罪を減らされるは先例のある

事ぞ希早六十有路の老幸

殊小よりお赦免小成ほしく共

中されぬ連むけ候通はれは始

苦界へ逃れつともおの悪事と

自首致せしめおまの

作せお路は自首致しませ

いさります ○え私に九十九里の遠

此一町の画  
宗菴が物  
語の様と  
四一なる也



の悴とさるる母の母ハ  
十四五六浦さあへお  
成るのそとくお  
小身小受えまはる縁小一二後上り十

遂に天の  
うけは換  
ぬるの  
お  
お  
お



又盗まき

石心肋

と打こ

か儲け悪いのゆい出来

ねと改む紋一毛

と自首

紋一ます

竹目シ且形

換お父さん由老奉

是淋されれと是く多々多々小向不問首

とらそ焼のぬあうはして竹達者

海ッて下とる

あはれ

おのれ

おのれ

おのれ



由老何卒私とせ梅りおまろ

お助けなされと下とるませ

採とれくりのまとむと金母と

とて由老方う父の霜霜盗放

百日以内の内刑ありんト

神植の梅を山母のまを存

本あつては口の梅梅由未

茶と茶肉花の園へもあはる

是を如くまうくあ不問

玉らん猪折うそを福と

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗

宗



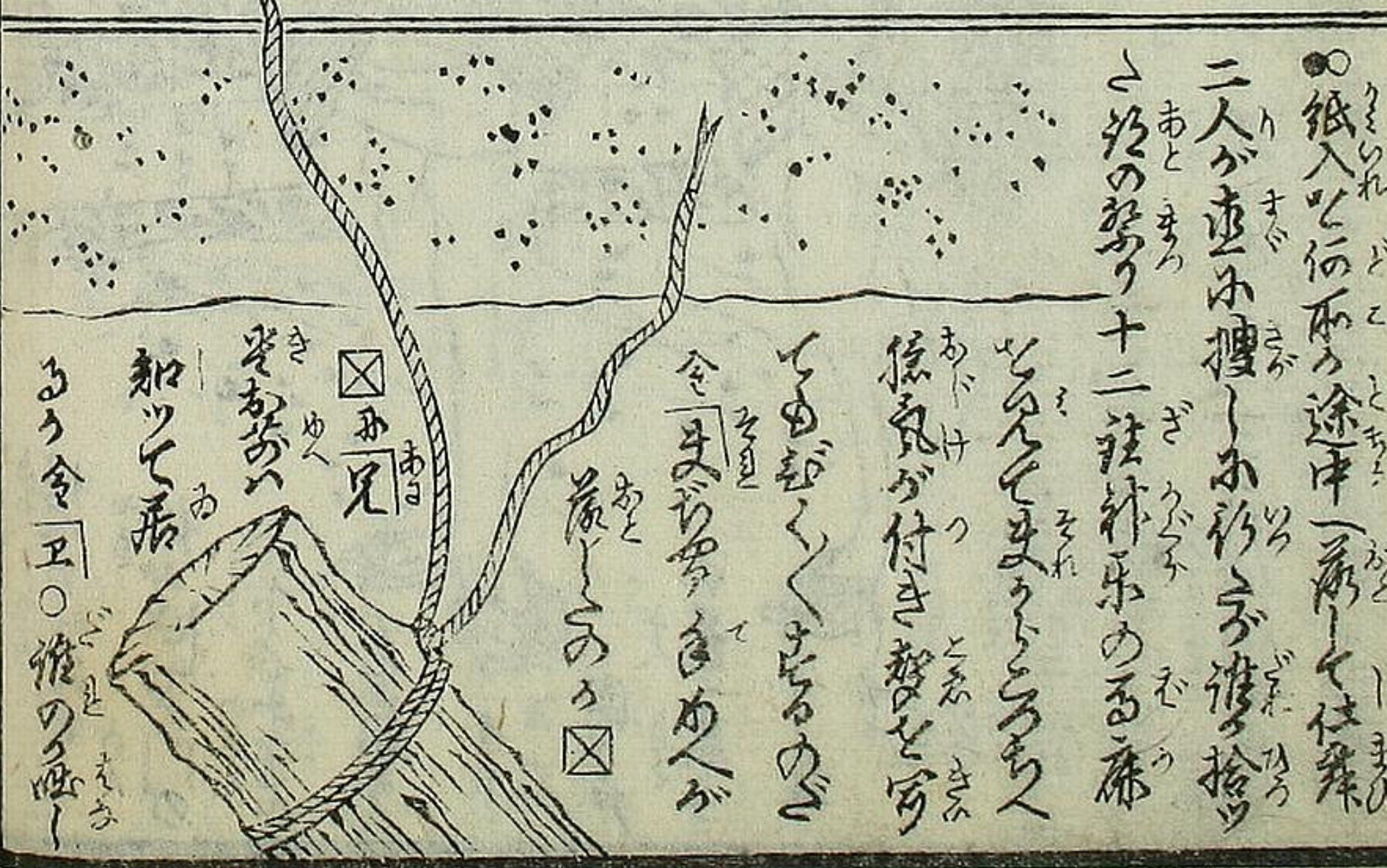
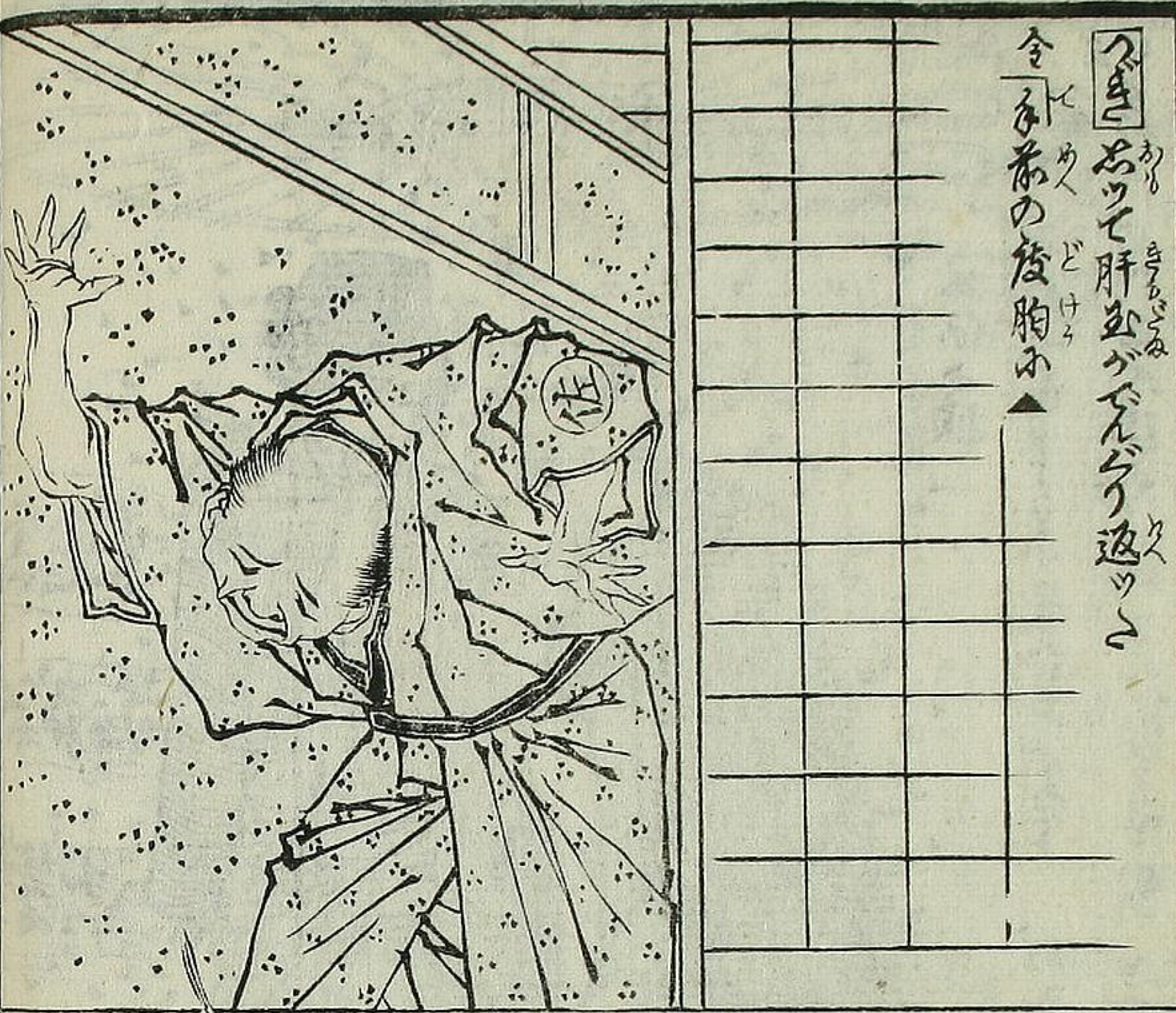








○紙入の何れか途半一筋にては舞  
二人が連舟摺しお新衣被せ  
おとまりの勢り十二柱舞の百席  
とんてまうとらあ  
あがけつり  
信負が付き舞を  
てゆわくくまの  
令まぢりまめか  
あ  
あ  
あ



○紙入の何れか途半一筋にては舞  
二人が連舟摺しお新衣被せ  
おとまりの勢り十二柱舞の百席  
とんてまうとらあ  
あがけつり  
信負が付き舞を  
てゆわくくまの  
令まぢりまめか  
あ  
あ  
あ

○紙入の何れか途半一筋にては舞  
二人が連舟摺しお新衣被せ  
おとまりの勢り十二柱舞の百席  
とんてまうとらあ  
あがけつり  
信負が付き舞を  
てゆわくくまの  
令まぢりまめか  
あ  
あ  
あ

○紙入の何れか途半一筋にては舞  
二人が連舟摺しお新衣被せ  
おとまりの勢り十二柱舞の百席  
とんてまうとらあ  
あがけつり  
信負が付き舞を  
てゆわくくまの  
令まぢりまめか  
あ  
あ  
あ

○紙入の何れか途半一筋にては舞  
二人が連舟摺しお新衣被せ  
おとまりの勢り十二柱舞の百席  
とんてまうとらあ  
あがけつり  
信負が付き舞を  
てゆわくくまの  
令まぢりまめか  
あ  
あ  
あ

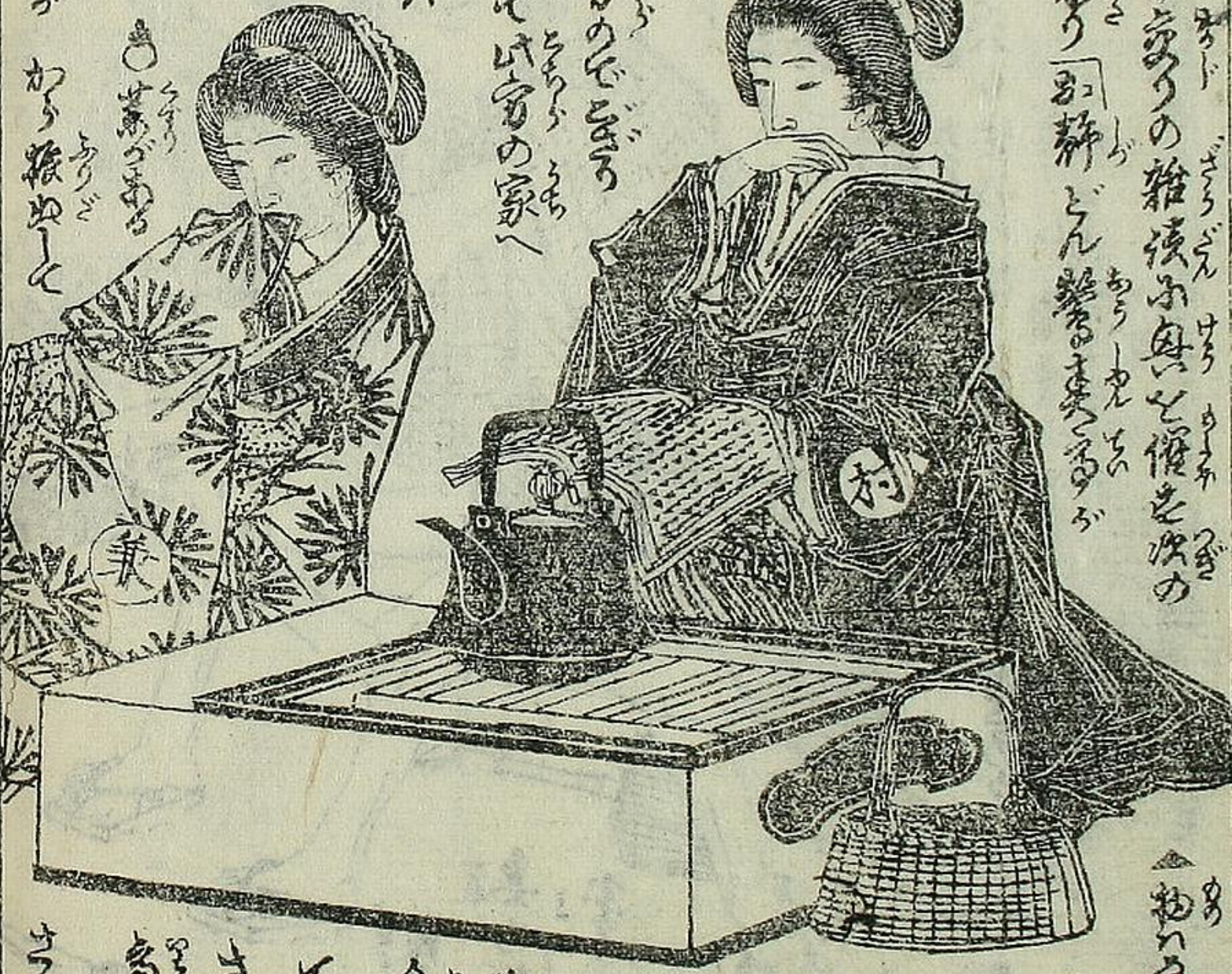






ついで世間の噂さあどおりの雑談お母と備忘の  
るよりお嬢あつひが出来る「お静どん」警備するが  
あり来り「オヤヤ」さうで  
ごころ来り「トレ」お福  
のおまゝをと致し「ま  
せうとお静の決りま  
ゆくを「お静の決りま  
ます村「チト」仔細あつてけさの家へ  
あつて「お静の決りま  
ごころの「お静の決りま  
あつて「お静の決りま

あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま



あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま

あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま



あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま  
あつて「お静の決りま



おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに



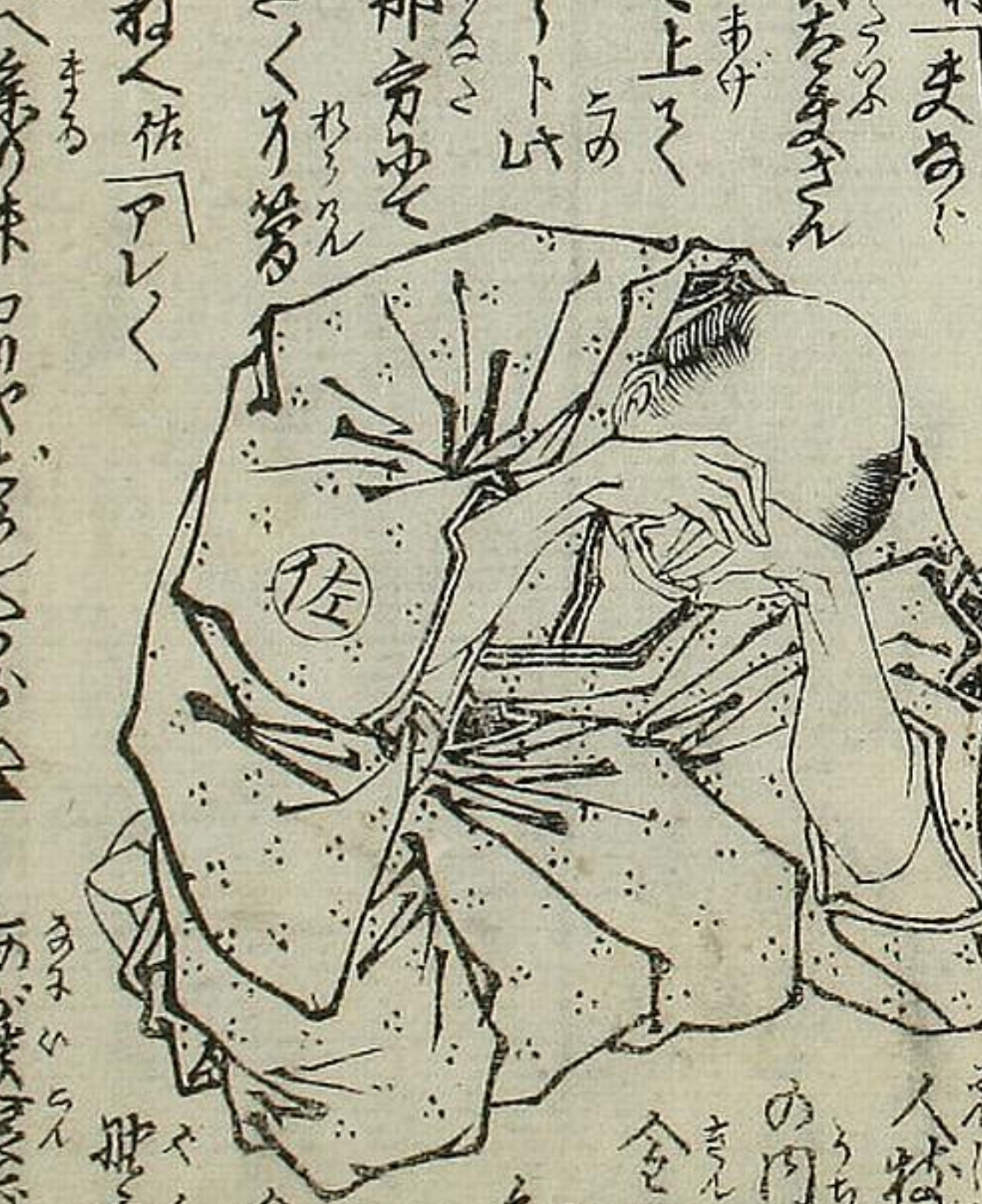
おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに



おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに

おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに

おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに



おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに

おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに

おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに

おきまゝに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに  
 申すに御成道に参り申すに



つぎ これの天窓へは横の太木とあり付  
ヤアがことには内表裏を交はせ下りて

○いられちを成る幼衆も控まらね  
とふあつて得と字なき 張まらせぬやア

若王しく親方定めてお板もま  
せうか全くお爺さん方小遠帳が

融されね令 出いアが  
人かお富され

有て信さ事おちどさるま  
せんわの煮相の出合取

いぬびりやぐるま井さうとくをいびり  
いぬの今令

殊不相おい得るあも受  
らぬ後の内の雇人

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

強くお徳としくとれが  
弱きと助る

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

本条の血気性といふ  
就方な合後ハ一喜大

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

頭お給ふお給けく  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ

おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ



おんお世令  
おんお世令

△何年か今日へ  
お出さお出ぬ















分署で是を乞ふに密に密に九一年二人を憐愍の  
刑と受事するに九月の上一年の目録より何百回  
といふを初めと引せし小味味に赤いは是と受事  
るのも路り受事するに心もねんを面とえい  
ては身かへぬに怒りの金書にねん取と  
あてあつらふ切と出して従ふり村  
身も受事するに密に密に九一年二人を憐愍の  
刑と受事するに九月の上一年の目録より何百回  
といふを初めと引せし小味味に赤いは是と受事



又分る何の巧に  
り判  
換と智  
の邪心  
と乳  
と鐵の心で  
のり裸せんや

氏保蔵のお通りあれは  
お母やが二重に後引るる  
あか私か引てトまうると  
石コリヤ依ま弟指くはての心得違の  
を扱お鳥と從倫と加下  
上あて友のお手教形を  
あいの心をも方い相と  
居居依へイ石コリヤ令助と  
能津のれえ後不方由未と  
前後あかんが先え先あつた  
まき事と密通世と中無恥辱と  
巧まうの言と俵ぬありの  
るまねの假へ何扱し強共  
は形のお面お取お出お出  
血を由るお後えは扱さ  
あ方の方では迷惑と  
それまうな  
まの四幕  
何代のも今  
ハ昇化の世の中お入



かある金別小  
扱と云はれは俵ぬ  
はあやまらぬか  
まの四幕  
密通世と終る心

氏保蔵のお通りあれは  
お母やが二重に後引るる  
あか私か引てトまうると  
石コリヤ依ま弟指くはての心得違の  
を扱お鳥と從倫と加下  
上あて友のお手教形を  
あいの心をも方い相と  
居居依へイ石コリヤ令助と  
能津のれえ後不方由未と  
前後あかんが先え先あつた  
まき事と密通世と中無恥辱と  
巧まうの言と俵ぬありの  
るまねの假へ何扱し強共  
は形のお面お取お出お出  
血を由るお後えは扱さ  
あ方の方では迷惑と  
それまうな  
まの四幕  
何代のも今  
ハ昇化の世の中お入



かある金別小  
扱と云はれは俵ぬ  
はあやまらぬか  
まの四幕  
密通世と終る心

















つぎ遊され不審ふふ  
もむらさきぞきりやう  
あつた  
お下まをば  
まきの今日  
お梅(あはら  
そり考が  
付ませるん  
佐(あ  
物不ふふの  
抱し有と  
二階くねが  
け發き村(さ  
あ

○ 同門外の橋  
まう「津の音  
由松後や  
おれた  
油の天鼓  
おや  
村「そん  
今の松  
おある「深  
油の天鼓  
おや  
○ 同門外の橋  
まう「津の音  
由松後や  
おれた  
油の天鼓  
おや



△ 由  
あ  
石まの乳  
楠(ま  
堅固のお  
△

あつた  
お下まをば  
まきの今日  
お梅(あはら  
そり考が  
付ませるん  
佐(あ  
物不ふふの  
抱し有と  
二階くねが  
け發き村(さ  
あ  
あつた  
お下まをば  
まきの今日  
お梅(あはら  
そり考が  
付ませるん  
佐(あ  
物不ふふの  
抱し有と  
二階くねが  
け發き村(さ  
あ  
あつた  
お下まをば  
まきの今日  
お梅(あはら  
そり考が  
付ませるん  
佐(あ  
物不ふふの  
抱し有と  
二階くねが  
け發き村(さ  
あ

○ 同門外の橋  
まう「津の音  
由松後や  
おれた  
油の天鼓  
おや

日本石巻四一

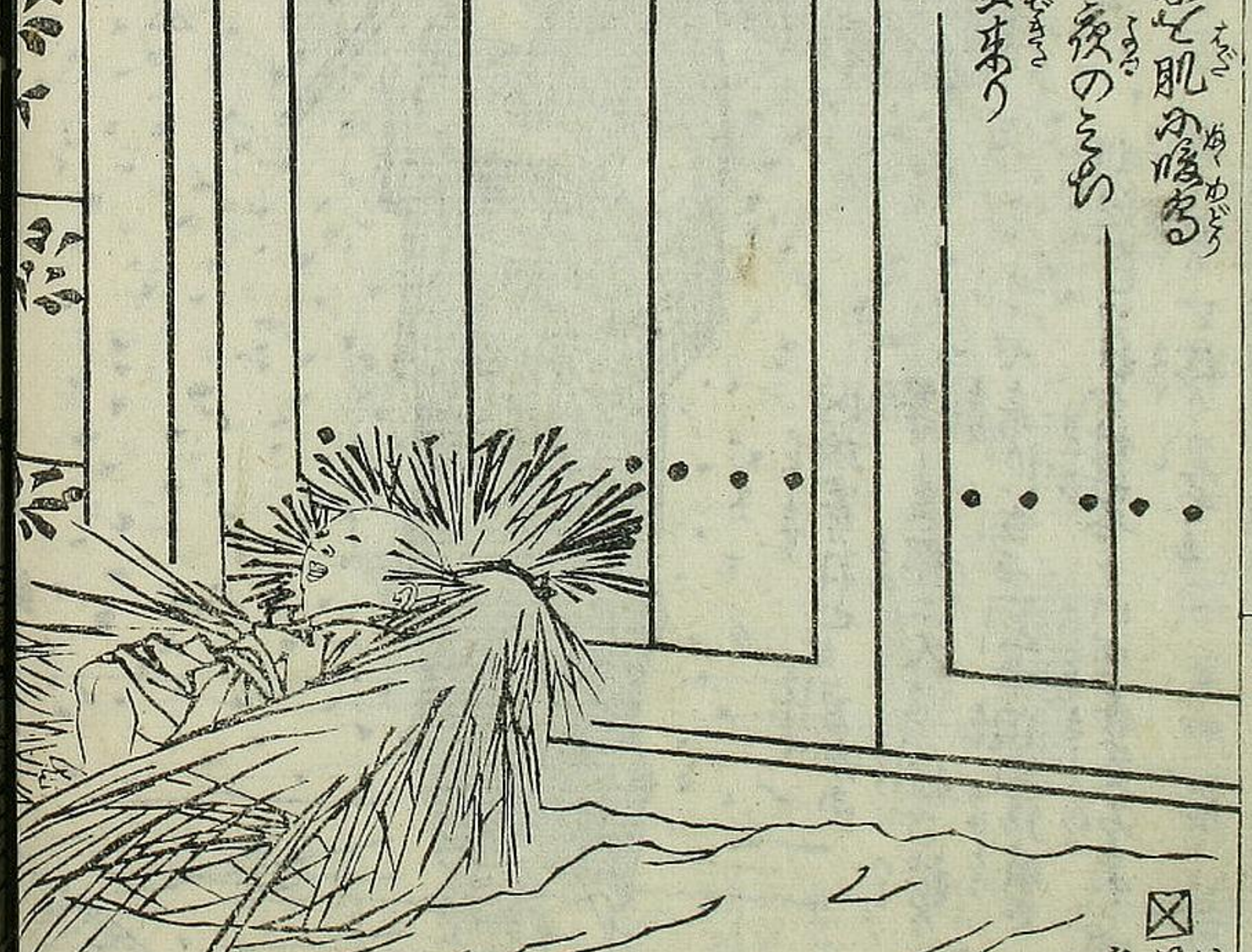


つぎ 破色 下小角と覆ひ被ふと肌か修る  
 ねむるも 露も 雨妙の ねと 目的 小夜の とも  
 ねむるも 雨も 露も 雨妙の ねと 目的 小夜の とも  
 ねむるも 雨も 露も 雨妙の ねと 目的 小夜の とも

根の 幾曲りと 考さ たる ねの ねれ  
 ねの 幾曲りと 考さ たる ねの ねれ  
 ねの 幾曲りと 考さ たる ねの ねれ  
 ねの 幾曲りと 考さ たる ねの ねれ

楠石齋

困る いや 困るといふ 眼病で  
 久安 翁 後 世 世 二 三 四



窓の 窓の 窓の 窓の 窓の 窓の 窓の 窓の 窓の 窓の



○ 仍小 妹 妹  
 町の 桐 園 氏  
 療 治 せ せ  
 小 治 石 齋  
 医 の 良  
 割 と せ 侍  
 の 内 小 快 意 二  
 取 り 白 き 物 毒  
 と の へ け せ 中 小 毒  
 眼 病 せ 自 由 小 歩 け の  
 出 来 せ と の へ 熱 火 の 中 の ね び  
 ね び 上 肌 へ と 通 せ せ 風  
 小 治 内 小 治 知 子 け ぼ と

近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と 近 辺 と

















此の多岐にわたる採り集り  
 少くはねとく多岐にわたる  
 少くはねとく多岐にわたる

ニハ

少くはね

010190517360



明倫彙編 家範典 卷一百一十五

孝行錄

帝曰：儻古帝孫也



卷一百一十五